ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会会報

発行責任者　酒井彰（運営委員会代表）

平成22年7月16日
通巻65号

特定非営利活動法人　日本下水文化研究会　第14回総会報告

平成22年6月26日（土）午後1時半から、市ヶ谷の日本水道会館において、第14回総会が開催されました。

佐藤八雷理事の司会ではじまり、今回の総会に5社の賛助会員が参加されていることが紹介されました。

第1部として分科会、支部の活動報告が行われ、石井明男理事より屎尿・下水研究会の活動、酒井彰代表より海外技術協力分科会、森島治夫関西支部・運営委員から同支部活動について、それぞれ報告がありました。2009年度活動内容ばかりでなく、活動の意義、これからの課題や方針にもふれながらの報告がなされました。それぞれの活動内容について、参加者が理解を深めることにつながったようです。

第2部・総会では、議長に木村淳弘関西支部長を選出した後、出席者22名、委任状81名、計103名の出席で総会成立の確認が行われました。次いで、議案書に予定されていた、下記の各議案に関する報告、提案がなされました。

第1号議案　平成21年度事業報告の承認ならびに会員の現況報告（酒井代表・佐藤理事報告）

第2号議案　平成21年度収入支出状況報告、平成21年度会計監査報告の承認（佐藤理事・松田監事報告）

第3号議案　財産目録の承認（佐藤理事報告）

第4号議案　新任理事の承認※（酒井代表提案）

第5号議案　平成22年度事業計画、事業予算（酒井代表・佐藤理事提案）

第6号議案　総会議事録署名人の選任（酒井代表提案）

各議案に対しての異議はなく、提案通りに承認されたことをご報告いたします。

※ 新任理事の藤田俊彦氏からのひとことを7ページに掲載

引き続き、第3部として、本会の海外技術協力活動を紹介する映像コンテンツが上映されました。海外技術協力活動の中心メンバーである高村哲さんの作品「バングラデシュは水の国」が紹介されましたが、映像を用いてNPO活動の概要や活動に込められた思いを広く社会に伝達するという動きに関して詳しい、小澤眞人さんに解説をお願いしました。小澤さんのお話の内容については、次項で紹介します。

15時30分過ぎからは、懇親会が開催され、例年どおりのなごやかな雰囲気のなか、賛助会員のCSR活動などに関する情報交換や、新たな活動プランなどを語りあいました。

総会風景

総会・懇親会に参加された皆さん

NPOと社会との新たなコミュニケーションツールとしての“デジタルストーリーテリング”

小澤眞人さんの講演から

海外技術協力分科会では、活動の目的と活動で得られた成果を、パワーポイントを用いた講演を行ったり、活動成果から論文や報告書を作成することで、社会への伝達を心がけてきたつもりですが、たいへん限られた伝達しかできていないということは否めません。

そこで、これまでストックしてきた写真やビデオを活用し、もっと広い層の人たちと問題意識を共有したり、私たちの活動に込めた思いを伝えたりすることができないかと考えてきました。そして、昨年の研究発表会で“NPOによるICT活用”について発表していただいた小澤眞人さんに、ご指導をいただき、映像コンテンツ制作をはじめてみました。その成果を、今年の総会の第3部で紹介することとしていましたが、その機会に、NPOが映像という新たなコミュニケーションツールを用いて、社会との関係性を深めていくといった動きについて、小澤さんから解説いただくことは、NPOの総会の場としてふさわしいと考え、ご講演をお願いしたところ、こころよく引き受けていただきました。以下は、講演録です。

（小澤）今日ご紹介するのは、新たに海外で始まっている市民によるビデオ制作運動で、デジタルストーリーテリング（以下DST）と呼ばれてます。カリフォルニアのバークレーが運動の拠点になっていて、私は、この1月

に行きワークショップに参加してきましたが、たいへんおもしろい動きになっていると思います。このことを酒井さんにお話しして、下水文化研究会の方とワークショップを開催させていただきました。今日はその内容をお話しさせていただきます。

私は、以前は放送局に勤務し、メディア企業に在籍するジャーナリストという立場でドキュメンタリー番組を作ってきました。DSTは放送番組や映画とも異なる、第３のドキュメンタリーと言われています。その由来ですが、90年代半ばにバークレーの応用演劇のワークショップ専門家と、ビデオアーティストが中心となって手法を開発しました。演劇ワークショップの知識が反映されている点が重要で、ビデオカメラ操作やビデオ編集の市民講座とは大きく内容が異なります。アメリカではDSTを学校教育、日本でいう総合学習に取り入れたり、多民族コミュニティーの再生活動や異世代間の対話の促進、社会的弱者の支援など、様々な領域で応用が始まっています。2002年あたりからイギリスの公共放送BBCがDSTを採用しました。地域住民向けにワークショップを開催し、出来上がった作品を放送やネットで配信しました。このことがきっかけとなってDSTはヨーロッパやオーストラリアへ広がり、図書館や博物館が中心となる地域の社会文化活動へ発展していきます。また最近ではユネスコや世界銀行による途上国支援の道具としても利用されているようです。

私はDSTの考え方・手法を日本にも紹介し、とくにこれからの社会を動かしていくセクターであるNPOがDSTを使っていけるようにしたいという希望をもっています。NPOや市民の方々が作れば、放送局が作る番組とは違うドキュメンタリーが制作されると思います。さらにICT技術を利用して、インターネットやソーシャルメディアを通して、多様な社会的コミュニケーションが進展していくと期待しています。

DSTの作り方ですが、皆さんがお持ちの写真やデジタルカメラ、携帯電話で撮った映像が使えます。手紙やイラストなどもデジタル化することで使用可能です。作品も3分前後と短いものなので、たいへん手軽に作れるという特徴があります。ビデオ編集にはパソコンが必要ですが、編集ソフトは多くのパソコンにインストールされているフリーソフトでできますから、パソコンを使い慣れた方ならすぐに始められます。今回ビデオを制作された高村さんは映像コンテンツを作るのは初めてだったのですが、半日でほぼ完成までいきました。高村さんは日本のNPO関係者で最初にDSTを制作した人になるかもしれません。たいへんすばらしい作品になっています。では、見ていただきましょう。

（上　映）

DSTでいちばん大切なのは台本である物語です。ドキュメンタリーの世界では「構成」といいます。いま、見ていただいたのは、高村さんが数年間の自身の経験を物語にしたものであり、高村さん個人の物語であるのと同時に、下水文化研究会の活動の物語でもあるでしょう。

では、従来のドキュメンタリーとは、何が違うのでしょう。まず、誰が作るかということですが、大きな特徴は、自分のことを当事者が自らが物語をつくり伝えるということです。DSTでは声を重視します。自分自身の物語を作った人が、台本を読むナレーターになり、自分の声で物語ります。誰かに伝えてもらうのではなく、当事者自らが一人称で語り伝える点が、従来のテレビ番組などのドキュメンタリーとは大きく異なります。

そして、誰に伝えるかということですが、これは目的とも関わってきますが、自由に選択できます。高村さんは、助成していただいている基金や財団、バングラデシュで支援の対象となっている農村の人たちや政府の人、さらに会員の方々に伝えたいと語っていました。誰に伝えるかは、共感・相互理解・アドボカシー・教育などDSTを作る目的と関わってきます。対象となる人々が変わると、作品の内容も変わってきます。これに対し、マスメディアとジャーナリズムでは、当事者の活動やその意味、問題がジャーナリストによって解釈された情報として、不特定の一般の人に提供していくことになります。ジャーナリストは中立的で客観的な存在であることが原則となっています。

DSTとマスメディアの比較を次ページの表に示します。DSTは対話的であり、協働しようという人と組織の水平的なコミュニケーションを行うときに適していると思います。異質な人々との間の共感と相互理解を得るためのツールといえます。またNPOにとっては、コストがほとんどかからないということもメリットかと思います。

NPOのコミュニケーション活動は、様々なレベルがあると思います。情報やデータを整理して、わかりやすく伝えるためには、パワーポイントなどの資料を用いたプレゼンテーションが効果的だと思います。これはマスメディア的な伝達型ですね。一方で自らの考えや想いを訴え、共感を得たり、相互の理解を進めたいとき、相手との関係性を作りたい場合は、対話型のDSTを利用することができます。NPOにとって両者は異なるコミュニケーション手法であり、時と場合によって使い分けることができます。

DSTの具体的な活用手法ですが、開発援助にかかわるNPOにとって、①活動内容の告知、PR、②アドボカ

高村哲さんの作品のタイトルバックとワンシーン

© î>& z G f0•>' s Ç “ å » Þ – ¬>& § Ï î ± î \ 2(5 b"Ó “>' t6ä$Î M*ñ x M ¦ 8 B ^]] ^ 8 [q#Ý [A • \ î 8 r M r S 1! @ 8 • b ? \ 8 : G \ _ X 8 Z [M @ ¨ C b4E ¥*å @ 6 ~ r M Ò ¥ H0t 8 S T 8 S Å ¹ œ c 3õ V \ † - | M • NPO b ¥ • Ç « ± µ Ç @ 8 ~ r K S G b o ? _ v NPO b#' … « ± µ Ç [6 • Â å ¢ Û ¹ © × b ‰ @ 8 • G \ @ 6 ~ < r M Â å ¢ Û ¹ © × [v •7Á0ð b l @4 ‡ [8 • \ 8 : G \ [M ? } × %? x Å ¹ œ b Ü s v •7Á0ð [[A r M #' … b + ¸+¬ } @DST † 8 • \ 8 : G \ v ô K Z Y •+ [c ^ 8 \ î 8 r M [< d § b/œ ;6õ €*… 6×*• ^] b Ü î ² î Û / b ›#Õ ^] [M § Ç [v #è ö ^ b ? ê ö ^ b ? 40 æ b Ç ? Ê j S U ^ b ? 8 • 8 • 6 ~ r M 8 • Ç _ | W Z 8 b Æ x1 } € • "@1 c M m Z$ ^ • \ î 8 r M Q K Z M m Z b "@1 @ | } _ \ W Z b%? †/² K Z 8 • \ î 8 r M &¾ c $Ù I ‡ b Â å ¢ Û ¹ © × b - | q · †3û L Z #' … b Ç @+¬ }1 ~ D 8 M • Å ¹ œ †0b >Ì

S 8 \ î 8 r M > Q } C&¾ S U @ • @ K Z 8 ^ 8 | } +¬3 b a#ú @/²#' I € • G \ [K { : Q b Å ¹ œ † A W ? E \ K Z ¥ • \ Â å ¢ Û ¹ © × †) j , K 8 P 0ð b µ @#Õ r € • G \ † | ƒ K r M r S ß î • Ý b Ç @ e8Ÿ †0Ž ô K S \ 8 :"@1 † L | : ^ C4 _ 6 • Ú b … æ b Ç _ < • G \ c e8Ÿ0Ž ô b · µ Ü E _ ^ W Z 8 C T • : \ î 8 r M G b | : _ DST c Q € † <#Ý M • \ ¦*… b Ç _ \ W Z] ^ Â#Ý @ •+ ^ , K 8 ¥ Ñ × ½ £ î © Ù å b4(½ [6 • \ î 8 r M

Ò ¥ c DST _ X 8 Z >0ð M • µ † “ r K S @ G € ? } v$Ù I ‡ b q · _ H Š I O Z 8 S T A S 8 \ î 8 r M] : v 6 ~ @ \ : H J 8 r K S ¢ • £

	DST> Ì > Ì H P0ð º>Ì È ¹GAGmGsGYG?GŠGEGuG•H >Ì H 4) º>Ì ¶%$GAGmGsGYG?GŠG	GlGGGoGUG1G0>Ì
1!FÜ>Ì	\ ¦*…H 1!F÷G H >Ì	3*.Ï..FþGFGqGŠGXGxGGGVH S6Û H >Ì
1!Fû>Ì	+¬#ä>Ì	Y"I ¨ XFþ M+áFþ ÇF»>Ì
1G">Ì	+¬G Fþ) 9,F¸ •FÔ>Ì	Ú*…Fþ vG) G G *ƒFØ>Ì
% $×>Ì	+¬#ä>Ì H ¹ ¤G‰%& «#.0ŽG‰G0GWGjG9GEGŠH >Ì	¶ ¹GCGŠGaGGFøFçFö>Ì H _ f jH >Ì
FùFþG FÖFû>Ì	M Ç&àF÷1 G >Ì >Ì	3 Ç&àF÷ 0{$×Fû eFß>Ì
FÔFô>Ì	+¬#ä>Ì 1 GF÷G >Ì	GoGUG1G0FþGGGFGsGŠGy>Ì
FùFãF÷>Ì	+¬#äH GÞ3QDEVF¸Î H >Ì	GoGUG1G0 V>Ì
-- 8 ’>Ì	D 8FçFï \ ¦*…Fû • “>Ì	v ¦FçFïGoGUG1G0 û F¸GFGqGŠGXGxGGGVFû • “
GAGGGV>Ì	X S ÇH y /2 FúFçH >Ì	X$Ò S Ç è VH y /2 G H >Ì

H ` Ý%> Ç ¶ 8 BH >Ì

2010 I = !ö" !î" @ Ë!•!ƒ Ë

Ö º c ¥ • í « ¥ µ º Û å » [Â Ý º å0° Õ ¥,e º v ¦ @ B Œ/ì _/œ ƒ € r K S • º c "I 9 ^0° Õ /œ ¦ c/œ ƒ N Â Ý º å b è ¥ _3Æ 8 W0° ¥&ì [N g †/œ 8 0° Õ ¦ †3û L Z& ? u } € S ¥ • \ « ¥ µ º Û å » b º v _ X 8 Z N S _ Ì K S 8 \ î 8 r M N g b b U è8× † \ v _ K Â Ý º å I b î 8 ^] †1 ~ œ 8 S 8 \ î 8 r M i • W Z H g • 8 S T E € d ¾ 8 [M

0°

z >8NPO 2 Ç ¥ • W È e ì%Ê'2
¥ >82010 º 7 v 31 ¥>& u>' S 11 ì 00 (>&7Ÿ œ>'>|12 ì 00 (
7Ÿ œ d >87÷ £7Ë I ° ~ • å §,< Ñ
¾ ¿4” !7÷ £ 2 : 34 : 31 TEL >803-3401-2682
q $ 9 ₱8 ¾ ¿ Ó º ß æ#ã)z € Œ •9P • L 5 (
5Ÿ Ù)z ¥,L S9P • L 10 (
è 8 × >8 Í ¸ Ý>ƒ Ç ß Û © œ å7÷ £ b Þ « º Û å>ƒ Î á Û _ Z
¾ ¿4” !7÷ £ 4-17-58 TEL >803-3403-1541>& æ>'
è8× 2 >83,300 Ç
æ 3 ¸ >8 N g I b g • c#æ3¸ s Y0[[M b [\ ¥ ì6ë r [_7Ÿ œ d _ >
7Ÿ r ~ W I 8 è8× _ g • H | ƒ b ‰ c • b Ó î Ý r S c FAX >& i C
~ y : b q ‹ b Ì î ª † H g!·>' _ Z 7 v 23 ¥ r [_ >%± } O C T I 8

d Â Ý º å N& I c å §,< Ñ ? } H L Æ 8 S K r M ^ > º3û ¦ _'¼ _ | ~6ë _ œ ƒ ^
? W S œ c N& I%$ K > 8 [W I 8
Â Ý º å N& b)*(7÷ £7Ë I>8 I ' –>+>/>/ •>+>/>/
d \ ¥ b ¸ *… •7Á0ð>8 090 : 6535 : 5684

いますか？」と質問してみた。
「無いです。以前も同じような質問をされた小学生がいたのですが、出島にはトイレは無かったんですよ」
「そうですか、小学生ですか・・・。でも、無かったと言うからには、無いという事を明記した文献か、史料はあるのですか？」
今回は、珍しく食い下がってみた。自分でも不思議だった。
「少々、お待ちください」どこかに電話をした。
「今なら、出島復元整備室に学芸員がいますが、お時間ありますか？」
丁寧な対応であった。復元整備室は同じ敷地にあるとの事なので早速訪問した。突然の訪問にもかかわらず学芸員の方は、とても懇切丁寧に説明をして下さり、トイレに関しても幾つかの手掛かりがつかめた。まずは、トイレに先立って出島の歴史を概観しておこう。
幕府は1636年、ポルトガル人によるキリスト教の布教を禁止するために、岬の突端に人工島を築き、そこに彼らを収容した。しかし両国の関係が悪化し1639年には、ポルトガル人の日本渡航が禁止され、しばし、出島は無人島となった。1641年、幕府は平戸のオランダ商館を出島に移転し、1859年の長崎・横浜・箱館の開港までの約200年間、西欧への唯一の窓口とされてきた。開国後の出島は、1866年外国人居留地に編入。明治以降は次第に周囲が埋め立てられ1904年の第2期港湾改良工事の完成により、扇形の出島はその姿を消した。戦後、長崎市は旧出島内の民有地の公有化に取り組み、2001年完全公有化達成。現在復元整備事業が進行している。このように、約400年の歴史の中で出島はその立場を変化させてきた。特に有名な、オランダ商館の置かれていた、約200年間においても、建物の建て替え、改築。火災による建物の焼失など幾多の変遷がある。確かに、何枚かの出島絵図をみると、描かれている景観が異なっているために、何か変だなと違和感があった。しかし、考えてみれば、それもそのはず、200年間の間には、建物も変われば、住まい方も変わるはずである。現在進められている復元整備は19世紀初頭の出島の復元である。
さて、やっとトイレに関してのお話であるが、カピタン部屋と呼ばれる建物の図面にトイレの記載がある。カピタンとは、オランダ商館長のことで、彼の住居兼事務所であると同時に、日本の賓客が訪れた際の接待の施設でもあった。つまり、出島の中でも中心的な建物といえよう。カピタン部屋は数回にわたって建て替えられているが、復元されているのは、1798年の出島大火の後に再建されたものである。具体的には1809年から、1833年までの姿を再現している。しかし、残念ながら、この復元建物にはトイレは確認できない。1798年の出島大火以前の建物と思われるカピタン部屋の図面の中には、２階に「女中洗濯所、及び便所」との記載がある。しかし、どの様なトイレであったのか、ここに残された字句以上の詳細は不明である。また、１階部分の地下から、便壺が発掘されたそうであるが、それが、いつの時代の建物で使用されていたのかは不明との事である。その便壺が現在どこに収蔵されているのか、不覚にも聞きそびれてしまった。これは私の勝手な推測であるが、もしかすると明治以降の民有地時代の便壺なのかもしれない。
展示品の中では、一番船頭部屋のオランダ商館員の住まいの中に、「おまる」が展示されている。一番船頭部屋とは、オランダ船の船長や商館員の住まいで、1階が倉庫、2階が居室となっている。1821年、出島で亡くなった一等書記ヘルマヌス＝スミットの財産目録をもとに、家具・調度品を再現している。その部屋のベッドの左側に、真鍮製の「おまる」が置かれている。当時は陶器製が一般的であったが、入手できなかったので、金属製のアンティーク品を展示しているとの事である。一方、興味深いのは、出土した陶器製の「おまる」が「旧石倉」に展示されている事であろう。「旧石倉」とは、安政の開国後に造られた石造倉庫のことで、考古館として使用されている。その「おまる」は考古館の1階、中央にガラスケースに収められて展示されている。いずれも、ふらっと観光で立ち寄っただけならば、見過ごしてしまうかもしれない。
これらの事から想像するに、当時、屎尿を溜めて置く習慣の無いオランダ人は、やはり、日本的なトイレは使用せずに、「おまる」で用を足し、海に捨てていたのかもしれない。船乗り達で構成される出島の住民にとって、「おまる」から屎尿を海に捨てる事は特に違和感無く行われたことではなかろうか。だが、出島はオランダ人ばかりで構成されていたわけではない。日本人の従業員もいれば、オランダ船が入港すれば、多くの日本人商人で賑わった事であろう。さすれば、やはり何らかのトイレが必要となると思えるのだが・・・。しかし、これらは全て推測のこと。まあ、やがて出島のことだから、今なお続く幕府の厳重な監視の呪縛から解き放たれ、トイレに関する新事実の公表が許される日が来るかもしれない。今しばらく見守っておくことにしよう。

一番船頭部屋内のおまる

染付牡丹文手付鉢（おまる） 有田 17世紀後半～18世紀初頭

バングラデシュ便り13号 (July/2010)

携帯電話

本会運営委員　高橋 邦夫

この国の携帯電話の普及には目を見張るものがある。この近年、ことに2000年を境にして普及率は指数的に増加しており、現在では世帯に一台といっても過言ではない。これは農村部での実態調査に基づいた事実である。農村部においてそうなのであるから、まして都市部においては言うまでもなかろう。

日本では私は携帯電話を持たない。必要としないからである。必要に応じた他の伝達手段があるからである。携帯電話の持ち主を、携帯の奴隷と揶揄したことがある。この気分は今でも変わらない。ことに電車の中などでの持ち主の態様には、ほとほと嫌気がさす場合が多い。勿論のこと彼らの応答を聞きたくもないが、廻りを気遣いながら話している内容は、言い訳と謝りが多いようだ。たまに傍若無人がいるが、これは論外である。傍若無人には、以外にもおばさんが多いのも事実である。彼らは携帯電話を持つことにより、携帯に縛られた状況を自ら招いているのであり、そうした中での彼らの顔つきは概して卑屈であるか、その裏返しとして傲岸である。

しかしながらこの国では、ことに外国人が何らかの活動を行う場合、状況は一転し、携帯電話は必需品となるのである。それでなくとも、脆弱な交通・通信などの社会基盤のもとで、携帯電話は、大げさな言い方をすれば、命の綱なのである。日常的な利便は勿論のこと、最低限の護身機器の一つといって過言ではない。2009年2月25日、ダッカで軍内部の反乱事件が起きた。いわば小規模なセポイの反乱の様相を帯びた事件であった。日本では多分報道はされなかったのではないかと思われるが、日時の偶然からか2.26事件を想起させた事件であり、その犠牲者をはるかに越える死者が出た。そのとき、私はコミラにいたが、ただちに、JICA-Bangladeshから連絡が入り、その後の行動に対する適切な指示が繰り返し届いた。

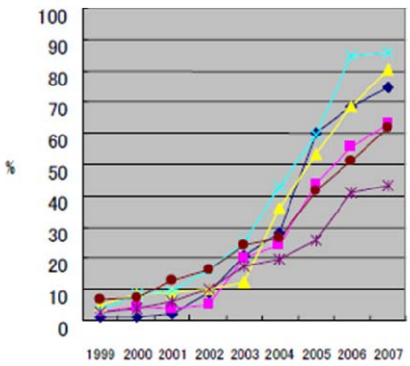
この国の携帯所有者は、それは、それはよく喋る。それでなくても何かにつけて喧しい人々である。アザーンやコーランの街宣車、バングラ歌謡の喧しさや、すさまじい警笛が飛び交う交通渋滞の中でも、彼らは携帯会話を断念しない。その結果、さらに輪をかけた大きな声と早口をまくし立てるのである。車での移動は、渋滞や道路事情の悪さもあって、長時間となる場合が多いが、彼らは携帯会話をしているか、そうでない時は寝ているかの二者択一としか思えないような仕草を感じることさえある。

携帯電話は予め、ある金額をグラミン・フォンなどの提供会社に払い込み、使用できることになる。プリペイドの仕組みである。農村地域でも、よくあるバザールなどにはグラミンなどのサービス店舗が整備され需要をまかなっている。携帯の電話番号とチャージした金額を記した台帳を見ると、10BDTの表記が圧倒的に多い。多くの人々にとって携帯電話は便利であるものの決して安価なものではない。かつては、そうした店舗では携帯通話そのもののサービスが行われていたが、電話そのものの普及のせいか、今では余り見かけなくなった。

打ち合わせや会議中、携帯が鳴っても平然として携帯会話するのもこの国の特徴である。この国では、何かにつけて尤もらしい挨拶行事が多い。モスリム長老のコーランの一節を吟じる儀式的な挨拶の後、主催者を代表して・主催者を補足して、ゲストを代表して・ゲストを補足して、地元を代表して・地元を補足して、などの長ったらしい、似たような内容の、つまらない挨拶がこれでもかと続く。活動の成果報告会などのプログラムを作成する場合、その開催時間の約半分は、こうした挨拶に充てられることを何回か体験した。そんな折は、何処かしこで必ずと言って良いほど携帯の着メロが途切れず、低い声ではあるが携帯会話が続く。

とある村である活動が始まるに際し、例によってオープニング・セレモニーが開催された。開催を告げる横断幕には、活動名、主催者とその代表、ドナーとその代表などの名称が記される。主催者の代表が延々と喋っているとき、突然、彼の着メロであるスター・ウォーズの序曲が鳴り渡ったのには驚いた。しかし、挨拶に陶然としている彼は、しばしその現実に気づかなかったのである。その後、所有しているもう一つの携帯に別な着メロが鳴り出した。しばらくして彼の側近が気付いて両方の電話を切った。主催者の代表には何の動揺も無かった。代表はこの国の国家公務員のかなりのクラスの人なのである。

国際会議や国内での大きな会議でも、この悪しき態度はなかなか是正されていないようだ。会議の議長が平然と携帯会話に応答している場面も見た。とある国際会議に出席したおり、後部座席で携帯会話が始まったが、「出て行け」というと、さすがに「ソーリー」と言って電話を切った。結局かれらも携帯の奴隷なのである。会話の重要性の選択肢が欠けているだけなのである。何故なら、先に述べた、かなりのクラスの国家公務員は携帯会話を無視したではないか。



コミラ市周辺６村の携帯電話普及率（世帯あたり）：見事な飽和曲線を描いている

理事就任ご挨拶

藤田　俊彦

この度の総会で新しく理事に就くことになりました藤田でございます。

私は、平成14年3月まで兵庫県職員としてその多くを下水道事業（主に市町指導業務）に携わりましたが、中でも日本下水道事業団に出向し「下水汚泥広域処理事業」を、阪神淡路大震災に見舞われた時の本庁在職時はその復興事業着手に到るまでの諸業務を、そして退職間際の兵庫県下水道公社出向時には公社組織改革案作成を経験したことはとても印象に残っています。

当会には、県退職後の間もない頃に入会させて頂き関西支部運営委員としてお世話になっていますが、これまでに無かった新たな出会い・経験をさせて頂いており、このような素晴らしい会でありながら会員数が減少しているのは何故と考えさせられます。

当会の組織・運営のあり方だけでなく、NPOの現状認知度等を私なりに勉強し、会員を増やす方策を考えてみたいと思います。この他にこれまでの活動を通じて感じた事は、将来を担う子供達への啓蒙活動の大切さです。当会として、もう少しこの事を前面に出しての活動方策を考えてみたいと思います。

以上、思い付くままに申しましたが、よろしくご指導ください。

ダッカでの映像コンテンツづくり

高村　哲

小澤さんから DST（デジタルストーリーテリング）という手法を教わりました。活動していることを理解してもらうと言うより、共感していただくための武器になりそうな気がします。共感し、納得していただくということは大きな力になるはずです。これをバングラディシュのメンバーがベンガル語で作れば、これからの私達の活動に大きな可能性が膨らむ気がして、現地事務所の実働部隊の基幹メンバー、アザットとパルフエスをテーブルに呼んで、さっそく手ほどきを始めてみました。

DST ということばを聞いていた彼ら、これを自分たちで作るというので、目を輝かせておのおのパソコンを開き、まずこちらで準備しておいた素材データをインストール。ざっと説明してから、「さあ作ろう」と物語の録音からスタート。今は時間がないから、こちらが準備してあるデータを使うが、自分が感じたことを、「私は・・・」という言い方で自由に作ることが大切なんだ！主役は自分なのだ！と強調する。「もっとゆっくり！」「気取るな！」「もう一回やらせて！」と怒ったり笑ったりしながら、みんなで、アザットのパソコンに群がって、2時間、音や、タイトル、字幕など入れたところで、次の予定の会場へ移動。その日は、各自データを持ち帰って、次の機会にベンガル語版を作ることにしました。

そして数日後、アザットはニコニコして、「見て見て！」と持ってきたのが、大学の卒業アルバムを題材にしたもの。パルフエスは、JADE の 1 分 CM の英語版。彼は、今の活動を、3 分から 5 分で伝える英語字幕付きのベンガル語版をいくつか作って、村での学習会で使いたい、そういうアイデアをいくつも持っていると熱っぽく語ってくれます。「そうだ、短いほどいいんだ、ベンガル人は話し始めると大演説になってしまうけど、みんなが飽きずに、楽しんで納得できるものがいいんだ」とさらにけしかける、パルフエスは「そうしたいんだ」と目を輝かせる。

これは、今回の活動の番外編です。ほかのメンバーも「私にも教えて」と言ってきましたが、「これからはアザットが先生だ、彼に教われ」と言って、コミラに移動。連日びっしりと働いてきました。

＊　　＊　　＊

総会第３部で紹介した高村さんの作品は、本会ホームページ、そしてご存じの You Tube でも公開しています。(英文タイトル：“Bangladesh: A Country of Water”）ベンガル語バージョンのたくさんのストーリーができて、ローカルの人々のモーティベーションを高めたり、エコサン・トイレを導入した学校での環境教育でも活かされていくものと期待されます。

水制度改革国民会議の動向

昨年開催しました研究発表会で、松井三郎京都大学名誉教授よりその趣旨について講演いただいた「水循環基本法」は、その素案が完成され、法案制定に向けた超党派議連に諮られることになりました。しかし、その後の首相交代劇、今度の参議院選挙と政局の混乱に巻き込まれ、議論が進んでいない状況です。国民会議では、広範な国民運動を推進することで事態を打開しなければ、水循環基本法の実現は難しいと判断し、「水制度改革国民会議国民運動推進委員会」を設置し、広く水問題に関係する団体に協力を呼び掛けることとしました。9 月 9 日には、国会近くで「水制度改革を求める国民大会」を開催する運びとなっています。この国民大会では、水制度改革を訴える請願活動を行う予定です。本会も私が委員の一員となり，諸団体への協力要請等の呼びかけに協力することとしています。

会員各位におかれましても、水制度改革へ向けた動きに関心を持っていただき、政府に向けた要望書への賛同署名等で、ご協力お願いいたします。　（文責　酒井

編集後記　NPO がそのミッションを果たそうとするとき、ターゲットとする人に意図を的確に伝えなければならないし、ときには、意識を変えてもらうことも必要になる。関係者の理解と協力も得なければならないし、実施にあたっては、資金も賛同者も必要になる。関係団体とのネットワーク形成が必要になることもある。こうした時にさまざまなコミュニケーションが必要になってくるが、DST は、こうしたコミュニケーションを円滑に進めたいと思ったときに魅力的で有効なツールとなるだろう。また、ストーリーを作ることで、活動を振り返る機会にもなる。そして、さらに活動の質を高めることにつながれば、好循環が繰り返されるものと期待できる。　（酒井 彰）

ふくりゅう 通巻65号　目次

第14回日本下水文化研究会総会報告	1
デジタルストーリーテリング（小澤眞人さんの講演から）	1
2010W. K. バルトン墓参のご案内	3
第49回定例研究会「上下水道に関する言葉の起源」（山野寿男氏）ご案内	4
多摩源流まつりと水干（源流まつり参加記）	4
旧事九官録　巻14　「阿蘭陀屋敷出嶋の事」	4
バングラデシュ便り13号　「携帯電話」	6

特定非営利活動法人　日本下水文化研究会
〒162-0067　新宿区富久町6-5　NJS富久ビル別館3F
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください
http://www.jca.apc.org/jade/index.htm
関西支部　http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsuhi/